



WWP

「究極の政党への 実験のあとで」

「短い二〇世紀」とソ連共産党崩壊の意味

加藤哲郎

エボ事件の一九一四年に始まり、ベルリンの壁が崩壊した一九八九年をもって終わった」と宣言したが（読売新聞「東京会議」国際円卓会議 社会主義体制の行方と世界」一九九〇年一月）、「短い二〇世紀」の終期は、一九九一年にとった方がよかったかもしれない。一八九八年のロシア社会民主労働党創設にはじまり、一九一七年のロシア革命勝利により世界に広がった一つの思想と運動が、その原点において最終的に崩壊した、という意味で。

●社会主義政党とレーニン、ローザ、ミヘルス

一九一七年に始まり、八九一九一年では崩壊した二〇世紀に現存した社会主義を、今日の時点で特徴づけるならば、それは、階級独裁型社会主義であり、国家主義的社会主義であり、共産主義政党が政治を独占する型の社会主義であっ

●「パーティは終わった」——ソ連共産党の解体
「パーティ（冥、党）は終わった」——一九九一年八月、クーデタ失敗後のソヴェト共産党解散を、イギリスの日曜紙『オブザーバー』八月二十五日付は、こう見出しで報じた。一九八九年の東欧革命につづくソ連共産党の解体は、いわゆる現存した社会主義とともに、国際共産主義運動をも最終的に瓦解させた。ソヴェト社会主義共和国連邦そのものも崩壊し、独立国家共同体へと分解・再編成された。

フランス国際関係研究所のドミニク・モイジは、「二〇世紀は歴史もともと短い世紀として、その幕を閉じた。サラ

た。

それは、階級闘争による国家権力の奪取という思想から生まれた。もともと一九世紀前半の社会主義は、自由・平等・友愛を求める市民革命の思想を平等主義的に継承し、産業革命のもたらす貧困・搾取・抑圧・悲惨に抵抗するものであった。当時の資本主義の現実から生産手段の私的所有による階級対立と階級闘争を抽出したマルクスの理論は、労働組合運動や労働者政党の成立を根拠づけた。しかし、生産手段国有化や市場の廃止をかけた、プロレタリア独裁や暴力革命の形態で理想社会を実現するという社会主義像は、必ずしも主流ではなかった。友愛コロニー建設や協同組合主義やサンディカリズムなど、平等主義的社会を志向するさまざまな潮流が存在した。

マルクス主義的潮流は、近代国家を「階級支配の道具」「ブルジョアジーの委員会」とみなし、労働者階級が国家権力を奪取し自ら支配階級となることに、解放の標準を定めた。これも、教養と財産をもつ男性名望家にしか政治参加の機会が与えられていなかった時代には、説得力をもちえた。しかし、労働者階級はいかにして権力に到達できるのか？一九世紀後半は、西欧での選挙による議会制と政党政治の本格的始まりでもあった。労働者自身による政党をつくり、普通選挙権と共和制を求め、労働者政党がブルジョアジーから国家権力を奪取し社会主義を実現する方向が構想された。もともとそれは、構成員が労働者のみであることを意味しな

い。労働者階級の長期的利益を代表するものこそ、真の労働者政党とされた。その長期的利益とは、議会政治から労働者利害が排除されている時代には、「科学的な社会主義」による理論的想定にならざるをえなかった。マックス・ウェーバーが世界観政党とよんだ、イデオロギー的に統一した規律ある労働者政党がめざされた。

その典型が、ドイツ社会民主党（SPD）であった。SPDは、二〇世紀初頭には黨員五〇万人に達し、帝国議会選挙で三割の得票を獲得する党に発展した。選挙区ごとに党組織がつくられ、労働組合指導者も国会議員になった。一九一四年の第一次世界大戦直前には、百万の黨員、一万人以上の地方議員、五百万票近い支持で一一〇人の国会議員を擁する、帝国議会第一党の大衆的組織政党になる。SPDはまた、全ヨーロッパ規模での社会主義政党の連帯組織、第二インターショナルの中心であった。イギリスにも労働党が生まれ、社会主義政党台頭の影響を受けて、院内会派や官職ポストを求めての獮官幹部団（コーカス）に起源をもつ近代の貴族政党やブルジョア名望家政党も、綱領・規約や地区組織をもつ近代政党へと転身した。

しかし、SPDは、大衆的組織政党として確立する過程で、プロレタリア独裁ではなく社会改良へと向かった。組織は官僚化・議員政党化し、第一次世界戦争勃発の決定的局面で、自国帝国主義の参戦を支持した。逆に「戦争を内乱へ」をかかげ「労働者階級の唯一前衛」を名乗るロシア社会民主

労働党ポリシエヴィキが、レーニンの指導のもと、一九一七年一〇月武装蜂起による権力奪取を成功させ、社会主義政党の歴史に新時代をもたらす。

帝制ロシアのツァーリ支配のもとで、ナロードニキの伝統をひいて一八九八年に生まれたロシア社会民主労働党は、少数精鋭の秘密結社として発展してきた。レーニンは、『何をなすべきか』『一步前進、二歩後退』で、労働者階級の解放は自然成長性にまかせるわけにはいかず、職業革命家の目的意識的な組織によってしか勝利はありえないと主張した。プロレタリア独裁を第二回大会綱領（一九〇三年）に書き込み、マルクス主義の正統を自負した。

一九〇五年のSPDイエナ大会は、選挙区協会単位の下部組織をつくり、党執行部に中央権力が集中する規約改正をおこなった。選挙区組織を幹部会任命の有給専従書記が実質的に支配し、それを幹部会のエーベルトラが統轄する、官僚的集権化の第一歩となった。ロシアのレーニンは、このSPDの中央集権化を、社会主義政党の前進として歓迎した。

そのころ、レーニンを批判したポーランド生まれのドイツの革命家がいた。ローザ・ルクセンブルクである。ローザの「ロシア社会民主党的組織問題」（一九〇四年）は、レーニンの組織構想を超集権主義と批判した。ローザが問題にしたのは、社会主義政党のあるべき姿であり、労働者の自発性と自己解放に基礎をおいた政党の形成だった。しかし「組織より行動を」を唱えるローザは、自党的官僚化に具体的対案を示

すことはできなかった。レーニンの方は、一九〇五年革命後は、超集権主義に民主主義を付加する民主集中制を唱え、党内では「批判の自由と行動の統一」を認めた。とはいえ、階級の最高組織である唯一前衛党の構想は、イデオロギー的正統性を他の「日和見主義」グループと競いあつて純化し、「第二インタナショナル風でない新しい型の党」をめざすことにより、維持された。

SPDの場合は、党内にさまざまな思想・理論潮流をかかえ、世論の監視のもとで労働者の政策的利益を労働組合活動や選挙や議会で他党と競いあうことができ、それでも官僚的集権化と党内民主主義の形骸化をもたらしたが、ポリシエヴィキの軍隊的集権化は、非合法・非公然の秘密結社型活動のなかで、目的意識的に選択されたものだった。

ローザの属する当時のSPDのなかには、第三の観察者がいた。ロベルト・ミヘルスである。一九〇二—〇七年にかけて、ミヘルスはSPD組織に属し、党大会代議員としてその官僚主義化を体験した。その体験にもとづいて、かの寡頭制の鉄則が発見された。ただしミヘルスは、社会主義政党だから寡頭制になるという問題構成をとったわけではなかった。むしろ、社会主義政党は近代政党の典型であり、貴族制を否定し民主主義の実現をめざしているにもかかわらず、寡頭制的傾向が現れることに着目した。「革命的政党のうちにもこの傾向が現れる」ということは、一定の目的を達成しようとするあらゆる人間組織に内在する寡頭制への傾向の存在に対す

る決定的な証明である」というのが、ミヘルスの立場であった。だからこそ、その観察記録は、『現代民主主義における政党的社会学——集団活動における寡頭制的傾向についての研究』と題された（一九二一年）。

●ロシア革命とポリシエヴィキ党

しばしば忘れられがちだが、一九一七年のロシア革命になつたのは、ソ連共産党ではなかつた。少なくともツァーリ専制を打倒した二月の民主革命の主人公は、ロシアのふつうの民衆たちだつた。ポリシエヴィキは、未だ共産党とは名乗つていなかった。

E・H・カーによれば、「一九一七年の二月革命によつて、今まで追放されていた多くの革命家たちが、シベリアから、また国外の亡命地から、ペテログラードに戻つてきた。これらの人々のほとんどは、社会民主労働党の二派——ポリシエヴィキとメンシエヴィキ——、あるいは社会革命党（エスエル）のいずれかに属しており、ペテログラード・ソヴエトに、できあいの活動の舞台を見出した」（カー『ロシア革命』一九二九年）。

スイスから帰国したレーニンは、四月テーゼで革命の第二段階への転化を提起したが、いわゆる二重権力下の六月の第一回全ロシア・ソヴエト大会の代議員構成は、八二二名中エスエルが二八五名、メンシエヴィキが二四八名、党員二四万人を擁するポリシエヴィキの代議員は一〇五名にすぎなかつた。

た。

レーニンとポリシエヴィキは、ペテログラードとモスクワのソヴエトで多数派になり、権力奪取の作戦計画が整つたところで、一〇月二四日夜—二五日（太陽曆十一月七日）、行動に出た。後に十月社会主義大革命とよばれる。これをカー『ロシア革命』は、「工場労働者を主力とした赤衛隊が市の中枢部を占拠し、冬宮へと進軍した。それは無血のクーデターであった。臨時政府は、無抵抗のうちに崩壊した」と表現した。こゝでの「無血のクー」の日本語訳は「無血の蜂起」となっており、クーとルビがふられている。いうまでもなく、クーデターのクーである。カーのかつての大著『ポリシエヴィキ革命』第一巻（一九五〇年）では「ほとんど血を流さぬ勝利」と書かれていた。イタリアのポツファらも十月革命「クーデタ説を必死で否定してきた。カーがいつからクーデタ説になつたかの診断は、専門家に任せよう。ソ連社会主義が「一九一七年のクーデタに始まり、九一年のクーデタで終わった」といわれるのも、あなたがち荒唐無稽ではない。クーデタからも、革命は生じうるのだ。

このクーは、第二回全ロシア労働者・兵士代表ソヴエト大会の日程に照準を合わせて計画的に実行された。今回は、ポリシエヴィキは、全代議員六四九名中三九九名という多数派を形成していた。レーニンは「全権力をソヴエトへ」を宣言し、平和に関する布告、土地に関する布告を採択させた。しかしこの時すでに、一月一二日の憲法制定議会の選挙日程

は定まっていた。全ロシア・ソヴェト大会で選出された人民委員会も、憲法制定議会までの暫定権力とされていた。憲法制定議会選挙は実施された。広大な農村を含むロシアの選挙結果は、七〇七議席中、エスエルが過半数の四〇一議席、ポリシエヴィキは、都市部では第一党になったが、全体では一七五議席にすぎなかった。

一九一八年一月五日に憲法制定議会が招集された時、すでにポリシエヴィキは、権力を手放す気はなかった。ヨーロッパに革命が広がるまで、エスエル左派と組んでも、ソヴェト権力は持ちこたえられなければならなかった。人民の利益の名において社会主義に賛成か反対かの選択を迫り、そのまま行政権が立法権を停止した。カー『ロシア革命』は、「政府は、この会議の再開を實力で阻止した。これは決定的瞬間であった。革命は、ブルジョア民主主義の慣習に背を向けた」と記す。

この直後の一〇日から開かれた第三回全ロシア・ソヴェト大会が、「勤労被搾取人民の権利の宣言」を発した。ブルジョアの自由をのりこえたと称し、社会権や民族自決権を主張したものだ。全権力のソヴェトへの集中」をうたい、生産手段の国有化による搾取と階級対立廃絶とともに「搾取者に対する容赦ない抑圧」「社会主義的社会組織の確立」を宣言し、「全世界における社会主義の勝利」をめざした。

ポリシエヴィキがロシア共産党と改称するのは、ドイツとのプレスト・リトフスク講和の直後、一九一八年三月の第七

回党大会においてであった。その年に戦時共産主義が導入され、エスエル左派との決別を最後に、他政党はすべて禁止された。かくして共産主義前衛党は、生まれつつあるソヴェト国家と一体化した。

一党制は、ロシア革命そのものには内在していなかったにしても、レーニンとポリシエヴィキの「超集権主義」「新しい型の党」「プロレタリア独裁」の構想に親和的だった。そして、政党と国家の癒着は、なにも社会主義政党に限ったものではなく、ミヘルスが自著の一九二四年第二版序文に加えた「ポリシエヴィキとファシズム——国家になった党、あるいは党になった国家」に固有のものでもなく、政党が市民社会の利害を独占的に代表し、一九世紀とは比較にならない強大化した国家権力と融合してくる限りで、「デモクラシー体制から脱線していく」(M・デュベルジェ)政党政治の論理に潜むものであった。

●コミンテルン——近代政党の限界への挑戦
ポリシエヴィキ党のロシア共産党への脱皮の一年後、一九一九年三月に創立された第三インタナショナル(コミンテルン)は、翌二〇年の第二回大会「加入条件二一カ条」で、その支部に各国民党に共産党と名乗ることを義務づけた。同時に、プロレタリア独裁の承認、社会民主主義との絶縁、民主集中制と職場単位で少数人数で作られた細胞型組織、ソヴェト擁護なども義務とされた。

コミンテルン＝世界共産党とはいかなる意味で政党であつたかについては、最近、拙著『コミンテルンの世界像』（青木書店）において詳述した。一言でいって、それは、近代政党理念の限界に挑戦した組織であつた。それは、以下のような意味においてである。

第一にそれは、代表の限界、権力独占の限界に挑んだ。すなわち、近代政党は、一般に市民社会内部におけるさまざまな利害を国家に代表し媒介する自発的な結社とされるが、コミンテルンにとって、政党とは「多かれ少なかれ階級および階級分派の利害を表現する」（エンゲルス）もので、政党政治とは「階級間の政治闘争のもつとも純粹で完全なはつきりした形の表現」（レーニン）だつた。コミンテルン自身は、労働者階級の利害を唯一前衛党として純粹に表現すると自負した。

それはまた、労働者階級の権力に到達したならば、たとえ不純な他政党を戦術的に残す場合があつても、共産党の権力独占をめざさねばならなかつた。すでに「プロレタリアートの祖国」ソ連は一党制であり、一九三六年憲法は、共産党の指導的役割を保障した。コミンテルンも、「プロレタリアートの独裁は、一国内における二ないし数個の政党とも、労働者階級の政党内における分派の存在とも、両立しえない」と宣言した（一九二八年）。

第二に、近代政党は、市民社会の活動のなかで民衆の支持を調達し、政治権力をめざす。コミンテルンの課題は、労働者階級の革命権力樹立であつた。コミンテルンは労働者階級

の唯一代表であるから、たんにプロレタリア独裁のみならず、究極的には「労働者階級全体が共産主義者になる」までの永続的活動をめざした。つまり、支持調達の限界へのチャレンジである。しかも、その権力奪取の方法は、「ブルジョア議会議主義」を粉砕してソヴェト制度におきかえる暴力革命が通例とされたから、選挙や議会活動での得票や政策的支持の獲得では不十分だつた。前衛党の指導を不可欠の要件としたプロレタリアートの先進的部分の組織化であり、労働組合など社会団体内フラクションを伝導・ベルトとし、少数精鋭の経営細胞単位で黨員を獲得し民衆を動員する、実践的・思想的支持拡大であつた。

第三に、プロレタリア独裁は、すでに成立したロシアの共産党国家を核として、世界革命＝プロレタリア世界独裁＝世界ソヴェト社会主義共和国連邦にまで広がるはずだつた。そのため、通常一國規模で組織される近代政党の常識に反して、また、たかだか全ヨーロッパで五百人ほどであつたマルクスの共産主義者同盟や、各国別政治団体・労働組合・個人の連合組織であつた第一インタナショナル、西欧社会主義政党的連絡組織であつた第二インタナショナルとも異なつて、モスクワの執行委員会のもとに、植民地・従属国を含む全地球的規模で活動する、単一世界政党という形態をとつた。一つの政党が国家・國境をこえ、「万国の労働者、団結せよ！」を文字どおりに体现できると考え、政党活動の規模の限界にも挑戦したのである。

そのうえ、第四に、以上のことを成し遂げるために、コミンテルンは、党の内部規律についても、自発的結社としての政党として考へうる最も強力かつ厳格な鉄の軍隊的規律を、全世界規模で実行しようとした。いわゆる民主集中制は、モスクワの執行委員会と各国支部、各国共産党との関係、各国共産党内部の中央指導部と地域・経営細胞との関係、細胞と個々の黨員との関係にまで徹底され、上級の決定の下級組織での無条件の実行を義務づけた。さらに、これら決定の実行は、共産党は階級の最高の組織であったから、労働組合、青年・婦人組織、さまざまな大衆運動組織においても、内部のフラクション・細胞とそれに属する黨員たちを伝導ベルトとして波及するよう奨励し指導した。ソ連では、民主集中制が三六年憲法に書き込まれ、国家組織や計画経済に及ぶ組織原理とされた。モスクワの執行委員会を頂点とし、世界のすみずみの細胞・黨員まで上意下達で放射されるピラミッド型の規律ある行動が、コミンテルンの夢見た政党活動の極限形態であった。すなわち、近代政党の特質とされる規律ある政党の限界への挑戦であった。

そして、第五に、これらを可能にするために、政党内のイデオロギー的・世界観的統一が重視された。M・ウェーバーのいう世界観政党とは、当時の宗教政党（ドイツ中央党）や社会主義政党（SPD）のことであった。コミンテルンは、政党構成員に、政策的賛同と綱領・規約の承認のみならず、世界綱領（一九二八年）に「マルクス・レーニン主義」理論

の正統性や「人民の阿片である宗教との闘争」をも書き込んで、思想上・世界観上の統一を求めた。いわば、政党としての究極の意思の一致を追求した。そして、そのイデオロギーは科学的真理とされたから、権力を獲得すれば、学校教育や思想・言論統制を通してでも普及し浸透さるべきものだった。思想的一枚岩主義（モノリシズム）への挑戦である。

● 現存社会主義と国際共産主義運動

無論、こうした政党活動の極限形態の実験は、そのまま実行できるものではなかった。「加入条件二一カ条」適用段階で、早くもいくつかの障害にぶつかった。

例えば、生まれたばかりのドイツ共産党（スバルタクス・ブント）は、創立直後に虐殺されたローザ・ルクセンブルクの思想に影響されて、当初は分権的で連合的な規約を持っていた。地域組織は自由に規約や党地域新聞をつくることができ、中央指導部は精神的・政治的指導の統轄に留まるものだった。それは、一九世紀ドイツ社会主義運動（特にアイゼナハ派、ゴータ合同党）の伝統でもあった（拙著「社会主義と組織原理 I」窓社）。

一九二三年のドイツ十月闘争の敗北と翌二四年一月のレーニンの死を契機に、コミンテルンは、「ローザ・ルクセンブルクの組織論の偏向」や「トロツキズム」などの全面闘争に入った。「レーニン主義」という名のイデオロギー的教義が創出され、全支部が従うべき模範規約（一九二五年）がマニユ

アル化された。いわゆる「ポリシエヴィキ化」であり、世界中にソ連共産党をモデルとした組織を形成する。それでもフランスには社会党時代の地域支部の伝統が残り、経営細胞は半数にみたなかつた。イギリス共産党には、労働党内での少数派運動としての活動を認めなければならなかつた。世界革命は長期の過程として再把握され、ソ連は一國社会主義に純化する。

世界共産党としての相対的に統一された活動は、一九二八年の第六回大会から三五年の第七回大会にいたる時期になされた。それは「階級対階級」戦術や「社会ファシズム」論の最盛期で、社会民主主義を主敵とした左翼主義的実践で民衆からの孤立を招き、ナチスの政権掌握を許す一因となつた。

コミンテルン第七回大会は、「反ファシズム統一戦線・人民戦線」に転換し、各国支部は各国共産党の自主性を一応承認したが、統一戦線政府の延長上には社会民主主義政党的の吸収併を想定し、スターリンによる粛清のコミンテルンへの波及や独ソ不可侵条約支持の強制には無力だつた。第二次世界大戦の勃発で統一指導は困難になり、コミンテルンは、大会も開かぬまま、一九四三年、解散にいたる。この意味では、世界政党的の実験は、四半世紀にすぎなかつた。

しかし、コミンテルン諸党の「ポリシエヴィキ化」は、「マルクス・レーニン主義」というイデオロギーと結びつくことによつて、コミンテルン解散後も半世紀近くにわたつて、世界各地に伝統を残すことになつた。世界政党的という規

模の限界への挑戦は断念されたが、政党的代表独占と権力独占の限界への挑戦は、続けられた。

第一に、共産党そのものは、コミンテルン解散後も世界中に増殖しつづけ、国際共産主義運動としての「兄弟党・友党」関係、「同志」とよびあう秘教的関係が維持された。

第二次世界大戦終了直後に「社会主義へのナショナルな道」の探求はあつたが、一九四七年のコミンフォルム結成は東欧諸国のソ連型社会主義建設への移行を強制し、翌年にはユーゴスラヴィアの除名をひきおこした。一九五三年のスターリンの死は、五六年のソ連共産党第二〇回大会のスターリン批判とハンガリー民衆蜂起をもたらししたが、一九五七年、六〇年とモスクワで共産党・労働者党会議が開かれ、後者には八一カ国の党が参加した。資本主義と社会主義との平和共存や、議会を通じての社会主義への平和的移行が語られたが、コミンテルンの伝統自体は、『平和と社会主義の諸問題』誌の発行や各党指導部間会談のようなかたちで存続した。

国際共産主義運動は、スタンフォード大学フーパー研究所『国際共産主義事情年鑑』のデータで、最高時百以上の党、黨員数九千万人を数えた。地球上の全労働者を共産主義者にするという理念にはほど遠かつたものの、社会主義・共産主義イデオロギーの普及という意味では、ある種の世界宗教的影響力を一時的にもちえた。

第二に、しかしその世界的広がりの内実にはちたいてみると、コミンテルンに発する共産主義政党的が、第二次世界大戦

後に東欧・中国・ベトナム・北朝鮮で政権につき、社会主義世界体制と自称したことが決定的だった。最高時九千万人の共産主義者の半分以上は中国共産黨員、ソ連と東欧で三千万人以上で、政権党黨員が九割近かった。

このことは、当初の世界革命党の想定とは異質の共産主義者が数多く現れたことを意味した。ソ連・東欧・中国などでは共産党が唯一のエリート供給源とされたため、共産主義を出世のためとわりきり「受容」する、世俗的で脱イデオロギ一的な黨員・テクノクラートが大量に輩出された。資本主義圏でも選挙と議会を通じて政権接近をはかる西欧型共産党が伸張したが、それは、階級の利益の純粹代表から国民的利益調整への重点移動を伴った。

第三に、モスクワのソ連共産党が国際共産主義運動を統轄するあり方は、コミンフォルム解散以降、次第にくずれていった。一時は「地球人口の三分の一を占める社会主義世界体制」が誇られ、ソ連共産党はワルシャワ条約機構による軍事的統合とコメコンによる経済統合を通じてその中心にあったが、一九六一年には中国共産党との対立が顕在化し、六八年「プラハの春」は、ルーマニアや西欧・日本の国際共産主義運動内自主独立グループを離反させた。七〇年代にはユーロ・コミニズムとよばれたプロレタリア独裁を放棄し複数政党制を認める西欧共産党の一时的台頭や、中越社会主義国
家間戦争もおこった。

それでも、「世界政党的民主集中制」に発する伝統は、国際

共産主義運動に色濃くつきまとった。米ソ冷戦のもとでは、反戦平和が国際連帯の接着剤となり、ソ連・中国は第三世界の反帝民族運動の一部の支持を調達することができた。ソ連共産党の友好的な党への資金援助も、つい最近まで行われてきた。また、それを批判する自主独立グループも、国内体制や自党組織内では、民主集中制という名の軍事的・集権的規律を保ち続けた。

第四に、ロシアから東欧・アジアへ広がった現存社会主義の国家体制は、コミンテルンの構想した共産党による権力独占そのものだった。東欧の大部分はソ連軍による解放下の共産主義化であり、中国・朝鮮でも社会主義建設の方式は同じだった。生産手段の国有化、中央集権的指令型計画経済、共産主義政党的の政権独占・情報独占、他政党的・労働組合・大衆組織を通じての全社会的支配、学校教育を通じての思想強制、異論の排除・犯罪視と秘密警察による監視などが制度化された。

これに対する民衆的反発は、すでに一九五三年のベルリン、五六年ハンガリー、ポーランドに現れ、六八年のチェコスロヴァキア「プラハの春」以降、市民社会に浸透し、充満していった。ユーゴスラヴィアの自主管理やハンガリーの経済改革は早い時期に現れたが、共産主義政党的による政治支配の独占だけは、コミンテルンの伝統と無関係に成立したキューバや、いわゆるアフリカ社会主義を含めて、共通だった。

一党制ないし準一党制による政治権力の独占は、国家組織や

社会団体を伝導ベルトとしての経済運営や、党崇拜・指導者崇拜を伴うイデオロギー統制につながった。これこそ、経済危機や民族対立とあいまって、八九年東欧民主革命と九一年ソ連共産党解散を招いたものだった。

●実験のこしたものの

コミンテルン型共産主義政党による代表の独占、支持調達の極大化、国家権力の独占、規律の極大化、思想的一枚岩化の実験は、けっきょくは失敗した。その根拠は、政党による代表・権力・情報・真理の独占の構想、唯一前衛党理念そのものにあつた。

共産党の支持調達は、いったん権力に到達すると、革命神話に安住した信任投票型選挙と世論調査も許さぬ市民社会統制・情報操作によって、不要なものとなった。正統性根拠が民衆から問い直されるルートがなく、一方的動員のみが行われ、次第に市民社会での脱政治化と不満鬱積につながった。

党の権力独占が法的に確認され、国家機構と一体化した。国有企業中心の指令型計画経済は、一時は重厚長大規格生産への動員と平等主義的分配に効率的に見えたが、労働刺激や消費欲求の制御メカニズムを形成できず、しだいに機能不全におちいった。党官僚を中核とするノーマンクラトゥーラ支配が市民社会に及び、政策上の失敗は「西側の宣伝」や「修正主義者」に責任転嫁された。政権交代は党内宮廷革命の様相を呈し、規律の極大化が民衆を萎縮させ、秘密警察が党機

構に逆浸透した。

これらすべてを根拠づける「無謬の科学的真理」「全知全能のマルクス・レーニン主義」は、時々の指導者の言説に合体され、国教として学校教育に制度化されることにより、むしろ脱イデオロギー化し、儀礼化した。しかも、二〇世紀の情報・交通手段の発達は、党Ⅱ国家統制の間隙をぬって、「壁」の外からのコマージュやニュースの侵入をもたらした。国家創設の革命神話は、「西」にあこがれる新世代の希望にはなりえなかつた。

労働者階級の唯一前衛党という神話そのものが問われることになった。代表の限界への挑戦は、利益の表出でも媒介でもなく、名目的「代行」にすぎない独裁と化した。同質的と想定された労働者階級は、秘密警察支配のもとで原子化され、意識のうえでも脱政治化し分解していった。農民や知識人にとっては、逆差別にすぎなかつた。民族対立は、階級対立とともに解消したと称して隠ぺいされたが、実際には根強く継承され、むしろ内攻していった。宗教者にとっては受難の時代で、面従腹背しつつ市民社会内の民衆運動を育てた。

一九八五年のソ連共産党書記長ゴルバチョフの登場は、火薬庫への点火につながった。チェルノブイリ原発事故を契機にペレストロイカがグラスノスチ情報公開に及んだとき、党Ⅱ国家体制は動揺し始めた。全人類の利害を階級的利害に優先する新思考外交は、東欧諸国をコミンテルン型民主集中制支配から解放し、戦車と銃の脅威なしでの改革の希望

を与えた。「フォーラム」開かれた討論の広場」が、東欧民衆の運動の母胎となった。鬱積した不満は、テレビ時代の情報ネットワークに乗って、八九年の連鎖的民主革命へと爆発した。革命神話の神通力がうされると、もはや党とはノーメンクラトゥーラの饗宴の場にすぎず、いったん民衆が動き出すと、裸の王様だった。「複数政党制と自由選挙」が東欧民衆の共通の要求となり、それが実施されると、唯一代表神話の虚偽は、白日のもとにさらされた。民衆の反抗には、下部組織の一般党員の多くも加わった。その合言葉は「一枚岩主義から多元主義へ」であった。九一年八月のソ連共産党解体も、一夜で二千万近くの党員が雲散霧消する、あつけないものだった。かくして、「パーティは終わった」。

● 効率的で規律ある政党组织の陥罪

二〇世紀は、世界戦争の時代であり、大衆民主主義の時代であり、組織の時代であった。政治でも、国家行政でも、企業経営においても、効率的で動員力ある組織が追求された。「パルタイとは分離であり区分である。パートであって全体ではない。党とは、それゆえ、境界を設けることである」とは、かのミヘルスの言葉である。社会主義政党的の成立も、当初は、平等主義的理想社会形成という目的実現の手段であり、議会政治に反映されない労働者階級の利害を市民社会内で「区分」し、「境界を設ける」ことだった。

しかし、手段が自己目的化し、他政党との競争のなかで

「部分」から「全体」たらんと組織形成を進める過程で、SPDは、専従職員中心に組織が官僚化し、政策決定においては議員政党化した。大衆政党となったSPDは、この組織構造を維持しつつ市民社会への融和をはかり、労働組合の支持を基盤にワイマール共和国で政権参加を経験した。第二次世界大戦後は「統一的な党の理論は民主主義の死」である（K・シューマッハー）と脱世界観化して国民政党的の脱皮をはかり、六九年には政権に就いて、漸次的な福祉国家建設を進めることができた。同じ第二インターナショナル系列のスイーデン社会民主労働党は、一九三二年から四四年間の長期政権を担当したが、開かれた社会内で世俗化し、他政党との政策距離を小さくすることにより、参加型デモクラシーのモデルを創造した。

ボリシェヴィキ型共産主義政党的は、プロレタリア独裁や唯一前衛理念、暴力革命構想と結びつくことにより、極度に集権的で軍隊型の組織となった。イデオロギー的に統一された規律ある党の理念は、市民社会の階級利益の純粹で独占的な代表という主観的使命観とあいまって、他政党・イデオロギ―との「区分・境界」を極度に厳格なものとした。戦争状態のもとでの権力掌握の成功は、他政党への抑圧、一党制へと結果した。市民社会と国家の媒介を独占した政党的は、国家機構と合体し、国家を通じての経済計画や社会統合の中枢になった。党の組織原理であった「鉄の規律としての民主集中制」が全社会的規模に拡張され、党組織規律の一部である

「分派の禁止」が異論者・異端者を犯罪視する原理として機能した。黨員の発言・行動は画一化され、指導者崇拜がどこでもつきまどった。

ロシア革命にも学んだ資本主義は、公営企業や経済計画を組み込む混合経済へと転身し、株式・金融制度の発展は、所有と経営の分離と資本の脱人格化をもたらした。男女平等普通選挙権や労働組合・社会主義政党的法認、社会保障や福祉政策で、労働者の政治参加・市民的同権化とシステム統合が進行した。フォード主義の蓄積体制・制御様式で生産力そのものを飛躍的に発展させ、多国籍企業の国際分業でボーダーレス化した。

SPDなど第二インタナショナル系社会民主主義は、この流れののって社会改良から福祉国家実現へとむかった。レーニン＝コミンテルン型共産主義政党的は、これを「体制内化」「ブルジョア民主主義」と侮蔑し、現存社会主義の自由と人権なき「プロレタリア民主主義」を誇った。しかし、自由権を否定しての社会権の承認は、資本主義圏での人権内容の拡大、福祉国家や政府・労働組合・資本家団体間の三極交渉（コーポラティズム）の出現で、社会主義の特典ではなく、むしろ人権抑圧合理化の口実にすぎなくなった。資本主義諸国共産党は、支持基盤の重なる社会民主主義政党的と対立し、やがて現存社会主義に距離をおくようになって、せいぜい抵抗政党的に留まった。

もともと共産党組織は、近代政党的の一つの型を、極限にま

でおしすすめたものであった。効率と規律ある動員では、軍隊とならび、最も強力な二〇世紀型組織だった。中央指導部のリーダーシップや実行力、内部の規律と統轄・動員力は、時には他党もうらやむものだった。戦後発展途上諸国の開発独裁は、共産党独裁の近代化効果をコピーしていた。

だがそれは、外部社会に浸透しにくく、下部組織の自発性・主体性を抑え、市民社会の世論をフィードバックできなかった。国民国家的正統性や大衆的前衛党をめざすと、階級的・世界観の純粋性と衝突せざるをえず、各国共産党間関係でも各国党内でも、思想的・一枚岩主義の建前のもとの世俗化と多元化が、内部を浸食していった。

「ベルリンの壁」崩壊直前に失脚し、いまや犯罪者として裁かれようとしている元東独（DDR）国家評議会議長・社会主義統一党書記長ホーネッカーの、失脚半年後のインタビュー記録は、共産主義政党的の代表と権力の独占の問題性を、喜劇的に表現している。彼は、なぜ自分が解任されたかが理解できず、クレムツラ政治局の同僚たちの陰謀に敗北したと信じている。社会主義は科学であり、DDRは高度工業国であり、党の存在が労働者階級の統一の保障であったと信じて疑わない。自分の仕事はすべて「DDRの人民のため」だった、秘密警察・情報機関も「西側では資本主義社会体制をブルジョア的な形態で維持するのに全力を挙げるものですが、わが国ではDDR領土内の労働者・農民権力の維持と強化に尽くすもの」だったと、真面目にいう（「転落者の告白」時事

通信社)。情報独占とその統制に依拠した閉鎖的政党の指導者は、市民の生活世界から幾重にもふり分けられて上申された党内情報を現実と信じ込み、その虚構に安住して墓穴を掘った。

一九九一年九月五日、ソ連共産党解散の二〇日後に、連邦人民代議員大会は「人間の権利と自由の宣言」を採択した。すでに実権は、ソ連邦大統領ゴルバチョフから、六月の自由選挙で四五五万もの得票で選ばれたロシア共和国大統領エリツィンに移行していた。その「人間の自由と権利の宣言」は、一九一八年の「勤労被搾取人民の権利宣言」よりも、二百年前のフランス人権宣言を継承するもので、世界人権宣言や国際人権規約をふまえていた。それは「いかなる集団、政党、国家の利害も、人間の利害よりも上におかれてはならない」と宣言した。レーニンニコミンテルン型共産党の「党の上」に個人をおいてはならない「原理を痛苦の経験を経て否定し、政党組織内にも人権が及ぶことを確認したのだ。

● 政党政治の二一世紀へ

近代政党は、近代国民国家や議会制民主主義とともに発展してきた。二〇世紀は、国民国家の地球的規模での増殖と二度の世界戦争での総力戦・国民動員を経験し、国民国家や議会制による市民社会統合の限界をもあらわにしてきた。「国民国家のたそがれ」や「議会政治の機能不全」とともに、「政党の衰退」もさきやかれるようになった。

政党政治は、大衆民主主義の普及と並行して、市民社会内部の自発的組織形成と民衆の利益表出、代表議会での利害調整と国家統一維持のしくみとして、二〇世紀に完成された。

レーニンニコミンテルン型共産党は、社会的多数者の利益代表と迅速で効率的な政策決定、規律ある行動と国民動員において、近代政党の最先端たることを志向した。それが実際に権力に到達すると、代表独占、権力独占、民主集中制を媒介することにより、究極的には革命神話とイデオロギーのみに立脚した国家主義的社會主義、独裁政治へと転化した。

それは、世界的な政党政治の環境変化に、適応できなかった。二〇世紀は、大衆民主主義の定着であり、民衆的・合法的正統性に依拠したヘゲモニー政治の始まりだった。あらゆる集団・組織が疑似的であれ参加を唱えた。行政組織は市民参加をくみこみ、企業組織でさえ労働者の自発性抽出を工夫してきた。国民国家自身が、多国籍企業主導のボーダレス・エコノミーの発展で、国際組織・国際法にくみこまれ、相互依存と主権の相対化のなかにおかれた。地球的規模での情報・交通ネットワークの広がりで、NGOが国境を超えて活動し、国際世論や市民運動が国内政治を監視するようになった。二〇世紀の政党政治一般が問い直され、近代政党の存在意義自体が政治のイシューとなってきた。

第一は、政党の代表性の問題である。二〇世紀社会の諸利害の複雑化と重畳化は、階級利害への還元は無論のこと、市民社会から国家への政党の利益表出・媒介そのものの限界を

露呈させてきた。あらゆる政党が国民政党を自称し包括政党をめざすが、少数者・弱者の声は政党内部の利害調整でふり分けられ、政治になかなか表現されない。複数政党制や自由選挙があつても、はたして政党が利益媒介を独占しうるかが改めて問われる。そこに、利益集団や市民運動が入り込み、単一争点政党やライブラリー・ポリティクス、新しい社会運動が生まれた。いわゆる「政党の衰退」は、政党支持なし層増大や長期的投票率低下に現れたが、同時に、市民社会内の無数の集団が、自己組織により活動領域を広げ、政党の代表独占を疑い、参加チャネルの多元化を求めていること、別の表現でもあつた。

第二に、政党と国家権力との関係である。党と国家の癒着は、なにも共産主義政権の専売特許ではない。政権交替がないまま長期の一方支配が続けば、議会制民主主義でも制度摩耗することは、今日の日本でも明らかである。権力分立とは、国家機構内部のチェック・アンド・バランスにより、絶対的専制権力の出現を防ごうとするものだった。共産主義政党はこれを「ブルジョア独裁の隠へい」と軽蔑し、指令型集権計画経済と国民動員に適合的な「立法権と執行権の統一」を実践した。それは、勝利した革命指導に効率的だった集権的党・軍事的規律の国家組織への投影だった。

二〇世紀は、国家機構と機能の肥大化の時代であり、立法権にたいする行政権の拡大の時代であつた。政治参加の拡大やメディアの役割増大とともに、オンブズマン・アセスメント制

度など権力制御の新しいメカニズムが考案され、企業経営においても労働者参加や市民社会との融和が模索されてきた。

しかし、私的自発的結社として出発した政党は、制度的に分化されたさまざまな権力機構にアメーバのように入り込み、逆に諸権力の接着剤の役割を果たすようになった。政党政治が定着することにより、国家機構のみならず政党権力をどのようにチェックするのが、民主主義の一大争点になる。国家の権力分立を補完する複数政党制と定期の政権交代、それを可能にする選挙制度や政治資金規制、政党と官僚制・利益集団との関係、さらには政党内部の民主化や指導者交代ルールが、新たな課題として浮き彫りにされてきた。ナチス独裁を経た戦後西ドイツでは、かつてH・トリーペルが国家の政党に対する態度（敵視→無視→法認）の最終段階においた「政党の憲法との融合」さえ現実のものとなった。

第三に、政党とイデオロギーの問題である。二〇世紀世界の政党は、おおむね宗教やイデオロギーを軸に、カトリック・プロテスタント・イスラム・仏教、保守主義・自由主義・社会民主主義・共産主義などに分かれた。レーニン・コミンテルン型共産党は、イデオロギー政党・世界観政党として権力に到達し、思想・表現の自由抑圧や「マルクス・レーニン主義」国教化をもたらした。政党が脱イデオロギー化し利益政党化すると、理念政治の停滞を招く。逆にイデオロギー過剰な政党が権力に就き独占すると、政党政治そのものが自滅する。政党政治におけるイデオロギーの意味と、政治の

重層的で生きいきした「区分・境界づけ」のあり方が、再検討されねばならなくなつた。

独裁を倒し多元主義を求める東欧市民革命になつたのは、まずは政党ならぬ「フォーラム」討論の広場」だった。「フォーラム」による革命」勝利後の東欧・ソ連に現出したのは、地域的・民族的・階級階層的・宗教的・世代的等々の利害とイデオロギーの表出を求める、無数の政党・市民団体・社会運動組織の繁殖であつた。それは、二〇世紀型包括政党国家の極限的実験をくぐつたうえで、生活世界からの政党政治の再創出過程である。

西欧では、ドイツ「緑の人々」のように、市民社会で活動しながら政党政治にも介入する環境イシューの社会運動が現れ、フェミニズムをくみこんだ政党政治の再編をもたらし、その延長上で、ヨーロッパでは、国内で比例代表選挙・多数政党制による連合政治を長く経験したうえ、EC経済政治統合を前に、ナショナルとグローバル・ローカル、エスニ

ック・エコロジカルなイシューを重層した、多元的で多層的な政治の新時代を迎えている。EC議会では、旧来のイデオロギー的分界にそつて国境を超えたゆるやかな連合会派が形成されたが、社会主義インタールのストックホルム宣言やSPDベルリン綱領でヴァージョン・アップした社会民主主義グループが、第一会派となつた。環境派や右翼政党もリージョナル・グループを形成した。同時に、エスニシティに根拠をもつローカル政党は存続し、労働組合や市民運動・社会運動のイシュー別ネットワーク化も進行する。そこに、スウェーデン、スイスの政治や、旧東欧・ソ連諸国の政治もオーヴァーラップして、ユーラシア大陸の規模で、二一世紀への政党

生き残りの実験が始まろうとしている。
ソ連共産党と国際共産主義運動の終焉は、このような意味で、たんなる一党独裁の崩壊ではない。「短い二〇世紀」の政党政治の総括と、新たな方向づけを迫つていのである。

(かとう・てつろう 一橋大学教授・政治学)

季刊 青丘 10

1991 winter

〔特集〕太平洋戦争と朝鮮

朝鮮にとつての太平洋戦争…妻在彦／朝鮮人強制連行と戦後処理…古庄正／「戦後責任を助ける旅」…増子義久／アジアに対する戦後責任を…高木健一／在日朝鮮人の戦後補償…田中宏／戦後補償における国家と個人…新美隆
〔随筆〕 落ちこぼれ草…飯尾憲士／映画に導かれた「朝鮮」…宮迫千鶴／子が親を教える…小中陽太郎／立原正秋と朝鮮…高井有一／「対談」日本の朝鮮文化の二十一年…大和岩雄＋金遠寿／国連同時加盟…そして…丹藤佳紀／国連加盟後の南北会談…小林慶二／変わりゆく大村収容所…小野誠之／明日に向かって…従軍慰安婦問題から…金富子／ルポ…在日を生きた…李美子／韓クニ行く…川添修司／架け橋／マンガ他

780円税込◎青丘文化社◎162東京都新宿区市谷本村町2-23 京都社ビル003(5266)1956◎振替口座東京0168674◎書店でお求めになれます。

SEIKYU

地球村から レポートする

知りたがるものより、知るべきものを

D・ハルバースタム

●インタビュー



デイビッド・ハルバースタム氏は一九三四年生まれ。ハーバード大学卒業。「ニューヨーク・タイムズ」紙記者を経て、現在フリー。六四年ベトナム報道によりピューリッツァー賞受賞。今回、(株)NTTデータ通信の招きで来日し、「フォーラム・オブ・関西」に出席。主な著書に「ベスト＆ワライテスト」「メディアの権力」「ネクスト・センチュリー」など多数。このインタビューは九一年一月二日大阪で行われた。

●聞き手
渡辺武達 (同志社大学教授)

ライターの場合

渡辺 昨日の講演ではソ連・東欧の変化に起因する冷戦構造の崩壊から説き起こし、それが世界に与えたインパクトと今後の世界の動き、力による秩序から平和秩序への移行の過程で起こるこれからのさまざまな問題についての指摘をありがとうございます。

ハルバースタム アメリカのニューヨークから太平洋を飛び越えて日本までやってきて、日本の人たちに講演をするということは人類にとっての空間と時間がすでに地球化している証明ですし、私の話を一〇〇人以上の聴衆が熱心にお聞きいただけたことは情報が確実に国境を超えていることを意